

## 第1回「元気なまちづくり部会」会議録

日時：平成16年11月7日（日）

午前10時25分～12時30分

場所：市役所8階801議室

### 出席委員12名

- 1号委員 木ノ本寛、島田洋行  
2号委員（一般住民）岩本克巳、北之橋貴美枝、中谷卓司  
2号委員（公募）大田貞、坂部嘉紀、谷口幸生、馬場博子、寶楽陸寛  
3号委員 福井逸治（部会長）、加藤司（副部会長）

### 欠席委員1名

- 2号委員 <各種団体> 澤口寛

#### 【大給企画経営室長】

それではどうもお待たせいたしました。定刻が10時半ということですが、皆さんがお揃いでございますので、ただ今から始めさせていただきます。それでは、ここは「元気なまちづくり部会」ということによりよろしくお願いいたします。それでは、まことに僭越ではございますけれども、会長から仮議長を務めるようにとご指名をいただきましたので、部会長が決まりますまでの間、私、事務局の大給が進行役を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは、早速ではございますけれども、お手元の会議次第に基づきまして、議事に入らせていただきます。まず、部会長、副部会長の選任についてということですが、部会長につきましては、規程によりまして委員の互選ということとなっております。自薦、他薦を問わず、どなたかおられませんかでしょうか。

#### 【岩本委員】

私も先ほどからメンバーを見ていたんですけど、皆様ご立派な方ばかりでございますので、大変僭越ではございますが、こういう時にはやはり、経験豊富な学識経験者の代表としてご出席いただいております先生、それも年配の先生にお願いしてはどうかということで提案させていただきます。

（異議なしの声）

#### 【大給企画経営室長】

異議なしということでございまして、学識経験者で年配ということで、福井委員、よ

ろしくお願いしたいと思いますが、よろしゅうございますか。

(拍手)

それでは福井委員、よろしくお願いいたします。福井委員につきましては、部会長席にお移りいただきまして、一言ご挨拶していただきまして、部会長から副部会長のご指名をいただきまして、進行のほど、よろしくお願いいたしますと思います。よろしくお願いいたします。

#### 【福井部会長】

年配の福井でございます。「元気なまちづくり部会」ということでございます。今後何回か、この部会を開催することになると思いますが、よろしくお願いいたします。まず、副部会長を決めなくてはいけないのでございますけれども、副会長には加藤委員にお願いしたいと思いますが、いかがでございましょうか。

(異議なしの声)

全会一致で、加藤委員にお願いすることになりました。加藤委員は、副部会長席にお移りいただき、一言ご挨拶をお願いいたします。

#### 【加藤副部会長】

ご指名をいただきました加藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は家が奈良に限りなく近い京都なんですけれども、毎日境界線をまたいで来ております。今日も、大体 2 時間ぐらいかかって来ました。実は前回ちょっと休みましたので、簡単に私と河内長野の関わりをご紹介させていただきたいと思います。

4、5 年前ぐらいになるのですが、河内長野の駅前の商業者の方々が集まりまして、「にぎわい河内長野 21」というのを作りました。その時に買った関係で、今でも毎月 1 回、夜 7 時ぐらいから 9 時過ぎぐらいまで通っております。私は大変河内長野に期待を持っておりまして、と言いますのは、この「にぎわい河内長野 21」をやってから、色々な方とネットワークが出来るんですね。商業者の方を中心として、駅前には作業所があるわけですね。障害者の方の作業所があるわけなんですけれども、そこの方とのネットワーク。それから今日お見えになっている谷口さんともそこでお会いすることができました。それから、事務局は商工会の内田さんという方がやられてまして、商工会からも 1 人、「にぎわい」にメンバーを派遣していただいております。そこをネットワークの要にしまして、河内長野をそれこそ、何とか元気にできないかということで、いろいろやっております。大変面白いなという風に思っております。ご存知の方も多と思いますけれども、先月の 10 月 17 日に、谷口さんにいろいろ企画をしていただいて、旧高野街道を中心に「にぎわいの里復活事業」ですね、西條酒造、それから商店街、それから、谷口さんが命名されたトライアングルゾーンというものがあるんですが、長野神社の 3 つを結んで、それぞれにイベントを配して、沢山の人が来ていただいて、出来れば商店街の方

もにぎやかになってほしいということで、実はこの間も1万2000人ぐらい、主催者発表で1万2000人が来られました。大変な人で、大成功と言ってもいいのではないかなという風に思います。そういう意味でも、私は可能性を期待しているものがあります。それから、今回の計画の中で、キーワードになります「協働」なんですけれども、その時も行政の方が、まさにボランティアで来られていまして、いろいろとお手伝いをいただきました。元気なまちにするためにはどうしたらいいのか、それから、行政と一般市民がどういう形で協力関係を結んだらいいのか、まさに実験場に河内長野はなるのではないかなという風に思います。2時間かかりますけど、2時間がそれほど苦痛にならない楽しいまちですし、そういうまちにするために、こういう計画に参画できることに大変喜びに思っています。どうぞよろしく願いいたします。

#### 【福井部会長】

本日は第1回目の部会でございますけれども、この会合で目標としているところは、河内長野市第4次総合計画基本構想骨子(案)というものについて、そのうち第1章と第2章について、部会としてではなく全般的な立場で審議をするということでございます。

この中の第1章と第2章について、本日は審議をしたいと。本日の12時30分が絶対の終了のタイムリミットでございますので、審議といたしましては12時20分ぐらいまでで打ち切りたいと思っております。どうぞご協力をお願いします。それでは最初でありますので、皆さん全員にご発言いただきたいということでございます。第1章と第2章につきまして、一人3分程度でご意見を、まず私の左の方から、木ノ本委員からお願いできますでしょうか。

#### 【木ノ本委員】

はい。共通の課題でということでございますので、前回も少し意見を述べさせていただきましたけれども、これから10年の長きの展望に渡ってのどういう位置づけをするかということで、今の時代背景とかですね、いろいろ洞察しますと、やはり何がほしいのか。目標はいろいろありますけれども、福祉にせよ、環境にせよ、あるいは経済の活性化にせよ、基盤整備にせよ、そのキーワードはやはり「人づくり」になるのではないかなと。人をつくることが、究極的な最も効果的な行政改革にもつながりますし、効率・効果的な行政運営、あるいはまた、市民の活性化、また、将来のまちの資本の蓄積にもなるのではないかなと、そのように私自身は強い強い信念を持っています。だから、あらゆる場面で、やはり教育も含めて、家庭、それから学校、地域社会全般に渡ってのキーワードというのですかね、あるいはまた、まちづくりの目標として、教育を向上したい。いろいろな所で人づくりというものを屋台骨というか、背骨、大黒柱にすべきことが非常に大切ではないかなと。その上に立って様々な枝や葉っぱや果実がついてくるのではないかなと考えます。当然、そのための幹を構築するためには、要するに、根っこ

の部分とか土壌の部分とか、土作りもいろいろある訳ですけども、むしろ土や根っこづくりが教育の部分、人づくりになるのかなと、このように思います。そういうことで、まず、そのことを共通の課題としていけたらいいなと。

もう一点は、やはり河内長野のこの素晴らしい、他市に比べますと、非常に文化的な歴史的な環境的な、あるいは人柄、いい部分が沢山あります。その部分をいかに特色をこのまちづくりに活かすか、このことも大変な、そして重要な観点になるのかなと、このように思っています。だから、河内長野のまず特色を活かす。その中で人づくりを大黒柱に据えることが必要ではないかなと、このように思います。以上でございます。

**【福井部会長】**

はい、ありがとうございました。一言で言えば、人づくりに向いているようでございます。続きまして、島田委員。

**【島田委員】**

はい、島田でございます。今回の第4次総合計画審議会委員に選ばれて、本当に光栄に思っております。

今後10年間のまちづくりに私が携わるということは、本当に今回、頑張らなければいけないなという部分と、そして、皆さんの意見を沢山聞きながら、いい計画が出来たらなと思っております。その中で、私が一番、今回のポイントとしましては、21世紀に入って日本も、また大阪も、そして河内長野も、大きな転換期に来ていると思います。すべての分野において大きな転換期に来ている中で、持続可能な、これからも、次の世代の幸せに、市民が、そして社会が持続可能にしていくためにどうすべきなのか、私たちの立場で、私は市議員なんですけれども、行政に携わる人間として、一市民としてどうあるべきかとか、地域社会がどうあるべきなのか、真剣に考えなければいけないという部分で、大変重要な役割であります。一番のポイントは少子化、ここにも書いていますけれども、次代を担う人づくり、少子化対策が大きなポイントですし、それと、河内長野は住宅都市として栄えてきた中で今、人口の減少という大きな転換期に来ていると。今後、市としてまちとしてどう発展してゆくのかという部分は、本当に真剣に議論していきたいということで今後取り組んでいきたいと思っております。以上です。

**【福井部会長】**

はい、ありがとうございました。時代を見据えてのご発言であったという風に認識しています。では、続いて、岩本委員お願いいたします。

**【岩本委員】**

私は河内長野市の商工の代表で出席させていただいております。私が考えていること

は、ただ今お二方がご発言されたものと同じでございますが、先週新聞を見ておりますと、レーガン元大統領が、長いスパンで見て国民の教育を充実させていくにはかなりのコストがかかると。だけど、それをやらないで、出来の悪い国民を山ほどつくればもっとコストがかかるという風なことを言っておられました。まさにそういうことでありますので私は今、河内長野だけでなしに、日本の教育も少しは転換期に差し掛かっているような気もいたしますが、こういうことに対してこの河内長野が、「教育立市」であって、素晴らしい環境にあるということが、このまちに住みたいという一つの魅力にもなると思います。そういうことで、これから少子高齢化で人口も減るだろうとは思いますが、そうじゃなしに何とかですね、逆にこのまちに住み続けていただく若い方たちが進んで転居してくれるようなまちにしていきたいという風に思います。以上です。

【福井部会長】

はい、ひとつづくりの中で教育を重視するというようなお話だと承りました。続きまして、北之橋委員、よろしくお願いします。

【北之橋委員】

文化連盟の方から出向させていただいてます。初めての方は、文化連盟というのとはどういう団体なのかと。河内長野市に文化、それぞれの自分の将来の夢づくりのために、いろいろな、公民館とか個人的に習われている部分の色々なジャンルが25団体あります。その中をまとめさせてもらっているものです。

自己紹介はその程度にいたしまして、私の、この席に出席させていただいております意見といたしましては、3点、今日は申し上げたいと思うのですが、1点目は基幹産業ですね。この総合計画でございますので、河内長野の夢とか全てのものを実現するには、財力と思います。その財力が、年々税収源の部分では減少しておりますので、昔、この中に、木ノ本委員と岩本委員と私、この3人だけがこのまちで生を受けて生まれ育った人間で、50年前の河内長野というのは、すごくお金がありました。それこそ、商店街は頭が見えないぐらいに、長野商店街のことを申し上げているのですが、人があふれて、その辺の、南河内の鑄鉄が盛んであったので、その辺の周辺の人たちが河内長野に就職を求めて参ったぐらいににぎわっておりました。駅前にしても、男性方が遊ぶお楽しみ場所とか飲食街ですね、そういう部分とか娯楽部分も河内長野はものすごくあったんですよ。だから私は、まず最初に基幹産業というものを河内長野にどういうものを誘致したらいいかという、誘致に対しても、市があとはガスを敷設するとか、電気をひくとか、あとの税収を何年かはみてあげるとか、誘致するからにはこの河内長野に住まれている方がそこで就職できるのですから、そこから税も落ちることですし、財力がちゃんとなっていくと思いますので、大きな意味では基幹産業の誘致を私は思っております。その産業が何であるかということとは、皆でまた考えるべきでありまして、そのように思

っております。

それから 2 点目は、さっきの 3 人方がご発言なさったように、モノが出来ても人間ですからやっぱり人材行政で、その中でも私は、家庭づくりが一番大事と思います。家庭がしっかりしておりますと、家の根幹になるものがはっきりしておりますと、そこに充実した仁・義・礼の教育というものが大事になっておりますので、家庭のお母様方が朝ごはんをきっちり食べさせられる、素晴らしい朝食を皆さんがいただけるような家庭にしたいと思います。

3 番目には、そのような二つが充実いたしますと、「夢」というものがございまして、そうすると先ほどのにぎわいのおっしゃっていただきましたように、人がまちを歩けば「ああ、楽しいまちやな。河内長野に住みたいな」とか、それこそ河内長野の歴史、文化というものは、私たちの文化連盟の中にも、郷土研究会というのがありまして、それこそ河内長野にはものすごく、日本でも京都とか奈良に負けないぐらいの歴史がございまして。それを上手に、また、住みたいなというまちにしたいと。そういう 3 点を複合的に合わせて、10 年間の計画に設定したいと思っております。以上です。

#### 【福井部会長】

はい、ありがとうございます。基幹産業の誘致といいますか、別の言葉で言いますと活気を取り戻すと。人材育成育成の上での家庭の力を上手に、解りやすくいうと、朝ご飯きっちり。短い言葉ですけれども。そして、歴史文化を利用するとそのようなことかと思えます。では次。

#### 【中谷委員】

中谷です。私は、自己紹介を兼ねまして申し上げますと、元々生まれは堺でございます。小学校、中学校、高校とずっと堺でございますけれども、堺で震災に遭いまして、今、住まいは鳩原という山中にあります。山奥でございます。河内長野というのは、ご存知のように山林が 7 割を占めているという全体の中で、私は河内長野市森林組合というところの組合長を大体 15 年やっておりました。それから、たまたま 3 年前に、大阪府森林組合というものが、17 の森林組合が統一して発足しました。ちょうど丸 3 年経過しているわけですが、正式の代表は府議員さんがやっておられましたのですが、やはりそれでは府の方が行革ということで、やはりプロパーでなければというサジェスションがあったようでございます。そして、大阪府森林組合と申しますのは、北は能勢・豊能地区、それから、高槻、茨木、島本を含むいわゆる三島地区、それから、旧の南河内と河内長野が合体いたしました南河内地区、それから、泉州が 7 つの組合がございましたけれども、ほとんど役所が仕事をしておりまして、7 つの組合が一体化したのが、一番向こうは岬町までの泉州の 4 地区に分かれて今、大阪府森林組合というのは運営をしております。そういうことで、我々は、仕事柄、今回の第 4 次総合計画でございますが、

本来は私は大阪府の所属をしているわけでございますけれども、なぜかまた私の名前が分かりまして呼ばれたわけでございます。私はやはり色々な提案がございます。

私はやはり、南河内の森林を守るという、大阪府の森林組合になったとしても、やはりこのことを優先的にやっていこうと考えております。代表である以上、均衡を保って運営しております。各地区の特色を活かした設備とか、色々な対応を今手がけています。今持っているものを活かすという、そういう経営方針で、いくなれば一つの企業、企業感覚でということと、従来の森林組合、これは国とか府とか市とかからの、いわゆる補助金ですね、これをいただいてやってきておったわけでございますけれども、今の時代、ご存知のように、いわゆる三位一体改革、これは国の方で議論されているところではございますが、これも色々な事情がございます、今月の半ばぐらいには何とか補助金を・・・、今までと違いまして、活動団体が6つか7つありまして、これが補助金を、我々から減らしますよという風に持っていったわけでございますが、今度は私は逆に、例えば我々の農林水産省ですね、そういうところになれば、この間、ご覧になられているとは思いますが、補助金がどうしても確保できませんという風な答えが出ていると。そういうことございまして、今は調整に入っているという風に聞いております。

そういうことございまして、私はまたもう1点、会が進むに従いまして、また申し上げたいことがございますけれども、今日はこれぐらいにいたしまして、いわゆる環境という問題を大事にしていきたいと思っております。

#### 【福井部会長】

はい、ありがとうございます。森林組合の立場といたしましてのご活動から、経営とか環境とか、本来地場が持っている資産を活用するということを重視するご意見であったかと思っております。それでは次に、大田貞委員。

#### 【大田貞委員】

大田です。私は約17年ぐらい前に清見台に移ってきました、こちらで大体最後になるかなという風に考えております。私は、職業という意味ではですね、商業関係の仕事をしております、地域商業であるとか観光商業であるとか、そういう風なものあり方というようなことをいろいろコンサルティングしているという職業です。

私自身が河内長野に来ての印象はですね、仕事柄いろいろあちらこちらのまちを歩いたりしているのですが、そういう意味では日本の中で大体10位に来るようないいまちではないかという風に印象を持っております。

どういうことかと言うと、まず住環境というのが非常に整っています。それから、自然との共生ということが、この総合計画にもあるのですが、それも非常によくできていると。ただ、不満なのはですね、いわゆる市街地、タウンという部分ですね、これが全くだめということが言えると思っております。どういうことかと言いますと、まちとい

うのは、私が考えるのはやっぱり、人々がいろいろと歩いて、その中でモノを買ったり楽しんだり、いろいろ出来なければならぬんじゃないかと思います。そういう意味で言うと、もちろん再開発の失敗といいますか、そういう風なものもあるかもしれませんが、商店街を潰してしまうような、そのようなやり方は間違いではないかと思いません。

それでいくつか申し上げますと、まず、総合計画としてどういう風にしてほしいかと言いますと、全国のこういう総合計画をざっと30ぐらい見たことがあるのですけれども、ほとんど同じです、書いてあることが。要するに、このまちはどういうまちなんで、どういう特徴のあったまちにしていこうじゃないかというようなことが書いてないのです。今回こうやって応募しましたのは、そういった、このまちは、総合計画というのは3年ごとにローリングします。ですから、10年経つということを考えなくてもいい。10年先の目標というものを一応、明確に作っておいて、そして、時代によって変化していけば、3年ごとにそれを変えていけばという風に考えているわけですが、そういう意味です、どうい目標がいいかというのはまた別の話ですが、大きい意味の明確な目標を作りたいという風に思います。

それから次に、行政という意味でお願いしたいのは、自治体というのは単に国にぶら下がる、また、議員にぶら下がるというようなことではなくて、独立しなければならない。まあ、アメリカ合衆国のような合衆国ではないのですが、やっぱり地区に自治会というものがあるように、市というの、市の自治というものをきちんとすべきであると。だから、今回も三位一体の話が出ていますけれども、三位一体のことはこれでいいのではないかと。それよりも、もっとその財政というものを市の中で考えていけなければならない。あまりにぶら下がっていたために、市の中で、一つの言葉で言えば、タウンマネジメントができていないのではないかと。だから、このタウンマネジメントをするような、自治の独立性を持った市を作っていくようにする、それが行政に対する私の要望です。

それから、総合計画としての個々の問題の要望としてはですね、やはり河内長野というのは私なんか清見台というところで生活をしていて感じるのは、この18%という高齢化率よりも、もっと高い形の高齢化の動きというものがこのまちはあるのではないかと。ですから、その辺をよく考えたまちづくりをしていく。ただ、高齢化だから、ただ体の弱い人のためのまちづくりではなく、高齢化でも元気なお年寄りも沢山いるのです。社会というのは、元気な人が動いて初めていい社会になっていくのです。ですから、元気な人の、高齢化した形の中の社会、そういうものを作りたいという思いがあるんじゃないかなと。また、そういう中で、これは他人の意見にいちやもんをつけるわけではないのですが、若い人を呼ぼうじゃないかという形、これは意図的にやって来るものではないと。だけど、誰かがおっしゃっていましたが、元気なまちをつくれれば、若者というのは自然に集まってくると。ですから、元気なまち、どんな形の中で作ってい

くか、要するにいろいろな環境があると思うのです。ハイキングができるような環境であるとか、商店街がにぎやかな環境であるとか、あるいはコミュニティが非常ににぎやかな環境であるとか、そうした環境をつくっていけば、自然に若い人も集まってくるだろうし、そしていまちもどんどん進んでいくのではないかという風に考えます。そういう意味で、私自身商業関係でしたので、一つのポイントとしては、これはまた後の方にあったと思うのですが、中心市街地というのは、これの作り方。単に私は商業だからモノを売る環境をつくっていくというのではなくて、人が集まる環境、そういうものをつくっていききたいという風に思います。具体的に言えば、三日市の駅前で再開発が進んでいますけど、どうも箱をつくれればいいという風に進んでいると、コミュニティが何も考えられていないと、そういう風な不満もあります。そういう意味で、これからまたいろいろ発言をさせていただきますので、よろしくをお願いします。

#### 【福井部会長】

はい、ありがとうございました。いくつかの重要なご指摘をいただいて、結果からいきますと、これで総合計画が出来たかなというような印象も持つわけですが、私なりに力点を整理しますと、まず、総合計画というものには、そのまち独自の個性がなくてはいけないと。よその真似事ではいけない。それから、自治体が誇りを持って、自治独立しなければいけない。平たく言うと、国や議員さんにぶら下がっているのではなく、ぶら下がり止めよう。それと、具体的には市街地の再開発のあり方について貴重なご指摘をいただいたと。そのようなことをうまくやれば、若者も集まり、まちに活気も生まれると、このようなお話であったと思います。これらの点について、今までのご発言については、再度意見を交わしたいと思うものでありますが、とりあえず皆さん全員に述べていただくということで、次にこちらのテーブルにいきまして坂部委員、お願いいたします。

#### 【坂部委員】

坂部です、よろしくごお願いいたします。緑ヶ丘北町に25年前から住んでおります。大阪市内で生まれ育ちまして、幼少の頃は満州・大連の経験がありますけれど、引き揚げて参りまして、その後は大阪市、そしてその後は堺市に住みまして、そして25年前にこちらに参ったわけですが、住環境と申しますか、非常に恵まれた住環境にあると思います。そういった特色があるところ、そしてまた、文化的な面で、神社仏閣が、全国的に著名なそういったものが多数ありますし、そういったことで観光行政の推進というのも大事かと思えますし。

ただ、都市基盤の点で、必ずしも十分に整っているとは言えないのではないかと感じます。例えば、下水道の整備状況ですけど、これは非常に市域が広いということと、高低差がありますからですね、物理的にも大変なプロジェクトになるのかとも思います

けれども、おいおいそういうのも進めていかれると思いますけれども、そういったところも少し感じたりもしています。そういった感情を持っているわけですが、本部会の中で、いろいろ委員の先生方のご意見をお聞きしながら、勉強をさせていただきながら、本部会がよりスムーズに進捗いたしますようにいささかなりとも、微力ですが寄与できたらいいなと思っております。

#### 【福井部会長】

ありがとうございました。下水道整備の遅れを指摘していただいて、都市基盤の整備が不十分ではないかというような観点からのご指摘ではないかと思えます。それでは谷口委員。

#### 【谷口委員】

谷口です。河内長野に住むようになって20数年経つのですが、その前は泉北ニュータウンに住んでいました。ちょっと一言申し上げたいのですが、都市イメージについて私の方で感じていることがあります。総合計画と外部から見た河内長野市のイメージは、ものすごくギャップがあると思うのです。住んでいる者、我々にとってはいいところだなという実感もありますし、色々出ていますよね、文化的な面ですとか。そして色々な地域資源もあります。金の面は厳しいそうですけども。

それで、仕事は主に、会社が元気になるようにお手伝いをする仕事だったのですけれども、大体、京都とか兵庫とか、そちらの方で仕事をしていたのですが、そこで親しくなりますと、「谷口さんどこに住んでいますか」となって、「河内長野です」と言うと、大体反応が「えっ、河内長野？どの辺ですか？」と割合近くだけれどもイメージがはっきりしていないというか。それと、マイナーなイメージといいますか、そういった形でいろいろな事例はあったのですけれども、結局そのようなことが続きますと、「谷口さんどこに住んでいるんですか」と聞かれて、「いやー、河内長野なんですよ」と、無意識のうちに「いやー」などと言っているんですよね。何で「いやー」と言わなければいけないんだろうと。そんな恥ずかしいまちなのかというイメージが割合にあったのです。「河内長野はたいしたことないんやな」というのがあってから、関心をもって地域を見てなかったのですよね。シニア世代になって、どこに住むかということで、河内長野以外に住むことを前提にいろいろ捜していたのですが、河内長野に住むのであれば三日市のあそこに住みたいなと思っていたのですけれども、運良くそこに住めるようになりました。今度は河内長野が終の住処ということになりましたので、今度は河内長野がよくなってもらわないと困る自分のこととして考えて、子どももやはりこちらで一緒に住みますし、という気持ちが入って、自分の問題として、魅力ある都市とはどのようなものかと考えると三拍子そろったまちではないかと思えます。これは、「にぎわい・うるおい・やすらぎ」の三拍子揃ったまち、元気印の地方都市としてアピールでき住民が、それぞれ自分

の居場所があって、それぞれ自分のやりたいこととかに取り組んでいて、各自が将来に希望を持っているといいますか、そういうイメージですね。先ほど加藤先生がおっしゃったように「にぎわい河内長野21」というグループが長野でありまして、いろんな問題はあるにしたって、先月にはイベントとかもあって、最終的にはご近所の底力という形で成功されたというようなことで見ると、ものすごい可能性があると思います。

千代田の人工的なニュータウンというイメージも強いですし、都市核といいますか、千代田と長野と三日市が、いい意味で切磋琢磨をして、都市間競争にこれから勝つという、これは小さなモデルですね、千代田、長野、三日市が特徴を活かした形。それと林業、農業が絡みあいながら魅力あるまちづくりをしていくというような形で組み立てていったら、非常に潜在的な要素といいますか、活性化にもつながる。元気なシニア、いわゆる活動人口といいますかね、それもおっしゃっていたようなことも増えると思いますし。

ただ、イメージという面から言うと、まだまだ、河内長野は、がっかりするようなことが多いと思います。例えば、大阪府の大阪エコ農産物を知っていますかというので、パンフレットをちょっともらったのですが、皆さんエコ農産物がどこで売っているのかわからないので、一度その辺を取材してみないと言っていたのですが、主な販売所、大阪市、堺市、豊中市、吹田市、枚方市、泉佐野市、寝屋川市、松原市、和泉市…。いつ出てくるんかいなと思いますが、東大阪市、河南町、千早赤阪村、そして、兵庫県尼崎市ということで、河内長野がないんですね。他の農産物、特産物の紹介をこの中で見ても、地図上の面積は大きいのに、何も載っていないんですね、富田林が何とか何とかあるのに。だから、そういったちょっとしたイメージが入らないのですよね。「何もない平凡なまち」というようなことなんですね。森林組合さんから、こういうハガキをいただいたんですね。「ラ・フォレスト・ギャラリーを見に来て下さい」。しかし、よく見ると千早赤阪村になっているんです。実際には河内長野の支店ががんばっておられるのかもしれませんが、イメージ的には千早赤阪村だろうなと。そういったところで、そんな大きいことでなくてもいいのですから、プラスのこと、明るい話題、トピックス的なこと、そういうことで河内長野が出てくるといいと、いろんなところで。最近では新聞でもプラスの面が出てきていますが。昔というのは、事件とか事故とか、遺体が発見されたりとか、マイナーなそういうものがどちらかというところと多くあるから、ついついつむき加減で、あまり「河内長野に住んでいる」と言えない、それが「いやー」という言葉で先に出てしまうというか、そういうことを感じていますから、これはやっぱり魅力あるまちに、そんな大きなことでなくてもいいですからね、みんながわいわいがやがや言いながら取り組んでいると、「楽しそうなまちやな」というような形からまずね。総合計画は、ある程度私から見ても、具体的な項目での表現というのはそんなに入っていないから、表現的には無理かもしれませんが、実際はそういう風な活動が支えていると。私も、まちづくり市民会議の半年間で、いろんな皆さん方のいろいろな意見を

いただいて、沢山おもしろい意見があって、早速こんなんやったら出来そうじゃないかなということで、方向性としたら、前、市長もおっしゃってましたが、「あれもこれも」はできない時代だと、「あれかこれか」の選択だと、施策的に。それに加えてですね、私は「あれとこれと」という発想での融合施策ですね、例えば、ある市民会議の場で高野街道歴史博物館を建設されたらどうかというような提案があったんですね。これは、吉年さんの大きな木があるところがありますよね、あそこが西條さんの旧店舗ですかね、ああいったところが…、でも、民間の住んでおられる所なので、すぐにはいかなくても、もし作れるとすれば観光施設であり教育施設であるというような形ですね。あれはまた、そういった元気なシニアの観光ボランティアの拠点にするとか。それと、天野酒の旧店舗とかが大分手入れが行き届かなくて、崩れたりしている、内部をちょっと見せてもらった時に。ああいうところは河内材を使って、森林組合が「いい河内材があるんですよ」という一つのPRの場所になり産業振興の場にもなる。エコ農産物的な物も陳列して売るとか、それを使った地産地消の小さなレストランをつくるとか、そういうような形で相乗効果を上げていけば、いろんな形で行政コストも下げながら相乗効果を上げるという中で、いろいろな人が関わりながら、わいわいがやがやして、そして「ビクター100万プロジェクト」というものも提案させてもらったのですけれども、河内長野のよさを知ってもらう中で、地域の振興も図れるわけですね。それらが、あちこちで取り上げられたりして、魅力あるまちのイメージにつながっていく。それらがインプットされて、住んでみようかなというような方向に向かえばいいなというところで、まちのイメージアップ策という面から組み立てをしていってはどうかと思います。

#### 【福井部会長】

はい、ありがとうございました。谷口委員からは、イメージというようなことで力点を置いて発言していただいたと思いますが、観光施設と教育施設が両方相乗効果を発揮するというようなご発言が、考え方として非常に興味深く伺いました。あれもこれもはできないけれども、あれとこれはできるというお話でした。続きまして、馬場委員、お願いします。

#### 【馬場委員】

大矢船からこちらの方に参加させていただきました馬場でございます。私はこちらに住みまして約20年経ちますけれども、ここが6回目の住まいなのです。と言うのは、夫の転勤がありまして、福井県、枚方市、京都市、西宮市、姫路市と回って参りまして、最後、夫だけ単身赴任しておりましたが、私は20年間ここに住んでいるのですけれども、他市との今までの住み心地とことと、やはりすごいギャップがありました。たしかに、20年前と言いますと、私の子どもの子育てもありましたので、感じるころは沢山あったんですけれども、今、谷口さんがおっしゃいましたように、イメージというのはちよ

っと「うーん」という部分が顕著に分かるんですね。西宮市とか枚方市なんかに住んでいました時に、やはり手に取るように色々なものが周りにありましたので、ある意味住み心地が良かったなと思いました。それで、20年前にこちらに参りました時には、何となく、出るには遠いし、周りがそんなにまだまだ充実していないので、「ここでずっと住むのかな」という不安感があったのですけれども、この20年の間に随分と環境が整いましたので、ここで誇れるまちにしていきたいという気持ち、それが、やはりここでちょっと頑張らなければいけないという思いにつながっております。

その一つとしましては、国際交流協会が出来まして10年少しが経つのですが、その時に参加しまして、それは日本の国の流れでもあったと思うのですが、やはり、そういうものがないということ自体が一つのイメージといいますか、将来子供たちがどんどん国際的な人間、グローバルな人間になるためには必要ではないかというようなことで参加しました。その育ち具合というのは、10年たった今も、「これでいいのかな」という風に私はよく思っているところがあるのですが、国際交流協会に参加しているスタッフたちはすごく頑張りまして、日本語サロンなどは、ある意味で大阪府の中でも評価されているのではないかと自負しているのですけれども、いい所がたくさんありまして、今からは小学校でも中学校でも、国際人と対等におつきあい出来るような、そういう人づくりが望まれてますので、そういう意味では、ますます国際交流協会としましては、頑張らなくてはいけないというところなんですけれども、この先行きは、北之橋さんも多分ご存知かと思うのですが、ちょっと先ずぼみもありまして、ある意味で市全体で盛り上げていくか、また、方向転換するか、その辺をじっくり考えていきたいところだと思います。

それと、私は、夫がぼちぼち地域に帰ってくる年代になっております。周りの同世代の方を見ていると、60歳なり65歳ですごく魅力もあり元気もあるのですけれども、こちらに帰ってきた時に行き場が本当にないのですね。あれだけのキャリアを持って、体力もあり頭脳もあり力のある人たちが、さてここでどんな風にして力を発揮していく場所があるのかなと色々考えるんですけども。その辺が、先ほどの基幹産業云々ということもあたりまちづくりという意味で、元気なまちにする一つの手がかりに活かしあえるものがあればいいのではないかと思います。その人材と、そしてまた私は生活人といったしまして、娘がおりまして、子育て真っ最中なのですけれども、私達の子どもの子育ての不安感と今の若いお母さんの不安感はずごく違うのですね。何となく、このままの子育てをやっていけるのかどうか不安というのはすごくあるかと思います。と言いますのは、私は、自分の娘だけではなくて、パン作り教室をしていますもので、若いお母様方がいつも見えるのです。そこで話されることから、この小学校に入れていても、このままでいいのかという不安感。であれば、私学を探そうかという動きがあります。すごく私はそれはもったいないと思うのです。これだけの市であり、これだけ人材があるのに、そこを利用しないで私学に流れそうな気配があるというのは、やはり市としても、文部

科学省の問題も絡んでくるのだとは思いますが、これはなんとしてでも、ここで充実した子育てができるような環境を整えてあげなければ、私達は20年間経つから、私達自身の責任はあると思うのですが、そういう風な不安感のあるまちは誇れるまちにはならないと思いますので、その3点、国際交流化の発展、子育てが安心してできるまち、それと、60歳以上の世代が何とか元気なまちをつくる基盤のお手伝いができるような、そういう風な土台があればうれしいなと思います。以上です。

#### 【福井部会長】

はい、ありがとうございました。6回もというか、6回しかというか、転居のご経験があるということで、貴重なご発言であったかと思いますが、中でも特に、国際交流の必要性とか、子育ての不安感というようなことについては、後にもう一度、皆さんのご意見を伺いながら、議論を深めたいと思います。とりあえず一律のご発言ということで、寶楽委員。

#### 【寶楽委員】

ずっと話が流れてきて、僕が最後に、話すことはもうないのではないかというぐらい、いろいろな問題が出てきたと思うんですけども、僕は今22歳なんですけれども、前回、この第4次総合計画の前の市民会議の方に参加させてもらったんですけども、その時は、何か自分に出来ることを頑張りたいと思い参加したんですけども、経験に裏づけられた知恵にどうしても押されて負けてしまって、どうしても何もできなかったという気がして、でも、どうしても僕も河内長野のまちづくりの1人の担い手になりたいなと思って今日も来ているのですけれども。

普段は大学生をやっている、あとは、ボランティアをやっている、どんなボランティアかと言いますと、青少年、子ども達、特に小・中学生を対象としたボランティアをよくやっていて、毎週キャンプをしたり、キャンプファイヤーをしたりとか、子ども達と接しているんですけども、その現場で感じている不満があるからここに来たんですけども、どうしても、子ども達を育てる方針とかがバラバラ。教育委員会のやることと、中学校、小学校でやっていることと、キャンプでやっていることとか、バラバラなんですね。そういうのがもう少し、いろいろな所で活用しあえるようなものをつくれればなあと思います。豊富な人材、人づくりがキーワードになっているのだと思ったんですけども。将来の希望として生まれてきた子どもたちを、皆さんからしたらただの子どもかもしれないけれども、そういう子どもたちにもっと目を向けてほしい。どんな財政難の時でも、将来の時代を担っていくのは子ども達ですから、今の子ども達にもっと視点を、視線を向けていかないと、また悲しいことになってしまうのではと思います。

あとは、僕達というか、若い1人として、河内長野をあまり知らないんですね。例え

ば、まちづくり市民会議にしる、総合計画審議会にしても、いつも感じるのは、何も知らない、無知なんですね。そういう意味で、もっと情報、「こんないいものがあるんだよ」ということをアナウンスできるような体制とかを盛り込めたらいいかなと思います。とりあえず勉強しながらアイデアで勝負したいと思いますので、よろしくお願いします。

**【福井部会長】**

はい。教育方針というか、教育委員会、学校やらボランティアの役割でバラバラというのはたとえばどういう点ですか。

**【寶楽委員】**

例えばですね、僕達キャンプリーダーというボランティアは、普段子どもたちとも接していて、子どもたちと話す技術はある程度あると思うんですね。でも、河内長野市は、学校現場では、大谷女子大学とかと組んでいて、僕達が介入しにくいんですね、行きたいのですけれども。僕は去年 1 年間、堺市の方の教育委員会がやっている、不登校児とかの世話をやっているボランティアをしていたのですが、河内長野でやりたいなと思っても、そういうとこで、河内長野市は別の大学を使っている。もっと子ども達に接する機会をとっていてもそんなにないというのが現実です。

**【福井部会長】**

寶楽さんの力を借りる必要はないとおっしゃったんですか。そういう不登校児の問題なんかについて、寶楽さんらの若い人たちのボランティア活動に対する必要はないと、市では考えておられるのではないかと。

**【寶楽委員】**

そうなりますかね。僕の周りだけなのかもしれませんが、河内長野の子ども達に何かしてあげたいと思っているものはやはりいるのです。しかし、実際にやろうかなと思っても、見えないんです、形が。どこで何ができるかということが。それは今、生涯学習とかの情報ですごく出ているのですけれども、やはりそれもまだまだ目に届いていないのが現実なんですね。

**【福井部会長】**

なるほど。若いボランティアの多くがいろいろ市役所に協力したいと思っているのが沢山ありますが、何かそれが入っていけないように感じておられるというような話であったかと思います。それでは、とりあえず、加藤副部会長に。

**【加藤副部会長】**

非常におもしろいお話をうかがうことができたと思います。多分、先ほど谷口さんがおっしゃった「にぎわい・うるおい・やすらぎ」プラスで、例えば「子どもたちが安心して暮らせるまち」みたいな、これはやはり目的だと思うのですね。ここに住むことによって、どういう生きている実感をするかみたいな、その目的があります。それを実現するための手段があると。手段というのは、普通であれば、いろんなことをやると行政サービスという形でお金がかかるわけですが、そのコストをできるだけ減らそうと思えば、例えば寶樂さんがおっしゃったようなボランティアの活動としてやる。もちろんボランティアはそれ自体が生きがいなわけですが、そういうことと、それから行政サービスをやるためには、要するに財政的基盤があると。財政基盤をやるためには、林業とか農業ですね、そういうものをいかに、工業も含めてですね、商業も含めて、活性化かしていくか。だから、全部つながってくるのだと思うんですよ。だから今日、皆さんのお話を聞いていますと、何か全体像がかなり浮かび上がってきているなど。だから、議論する時に、どれが目標で、どれがそれを実現するための手段で、あとは、それが客観的に、「実際どうなの」と。例えば、これから60歳とか、先ほどシニアの方が18%とかおっしゃいましたけれども実際はもっと多いのではないかと、じゃあ、それが客観的なデータとしてどの程度にあるのか。それが例えばこれから増えていった時に、財政的基盤はどうなるのか。固定資産税は入るかもしれない。しかし、所得税とか市民税みたいなものは、住民税みたいなものは入ってこなくなるかもしれない。そしたら、どのくらいのお金が実際のところはあるのか、ないのかというのはですね、ちょっとやはり厳しい目で見ていかないと、議論がかなりあいまいといいますかね、空論になる可能性があります。だから、この状態で行ったら、何かやると言ったら金がないと。金がないと言った時に、じゃあ、どういう形でやるのかという風に、ちょっと詰めた議論が出来るようになるのではないかという気がしました。

【福井部会長】

はい、どうぞ。

【中谷委員】

ボランティアに関しまして、言うてもいいのかどうかちょっと分かりませんが、滝畑ダムの上の方に市有林ができたということをご存知の方はいらっしゃるでしょうか。昔の相互タクシーが、辞めた方を働かせるために、滝畑のダムの上流ですね、あそこに297haの森林を市が安く手に入れたという事情があるのです。これを、我々の森林組合がですね、どうしてお手伝いしていこうという、これは出来ておるんですけど、その中にあくまでダムを守らなければいけないということになると、水資源の確保するということになると、やはり山にこれから手を入れていかなければならない。そこからやはり、ある程度の利益も生んでいかなければいけないと。それが、観光にもある程度役に

立っていくということにつながっていくという構想は持っております。そこに、択伐とか間伐とか、いろいろな地区を決めまして、順序だててやっていくと。しかも、やはり儲けがないといけませんので、今は材木は安いということは、皆さんご存知だと思います。昭和30、40年代に比べたら3分の1か4分の1ぐらい。それでも、それを何とか活かすためには、採伐というか全部切ってしまうと何も値打ちがなくなりますので、やはりいい木を選んで択伐をし、その跡にどうするかといえば、やはり植栽をしていただくという問題があります。今まではスギ・ヒノキがほとんどでした。ご存知のように、滝畑には有名な茅場がございます。これはあくまで滝畑の所有ですけども、それを我々河内長野森林組合がお借りして、施業をやってきておったのですが。それはそれとして、茅場は滝畑の所有地でございます。だけれども、今度は針葉樹ばかりの森林で、いわゆる広葉樹、ケヤキやブナやナラ、クヌギなども混在して、いわゆる針葉樹と広葉樹の混交林にすることは観光の為にもなるし、木の為にも良い。これからの話ですけれども、そこへ「森林のボランティア」の活用を市と協力して進めていきたいという意気込みを持っておりますので、是非、市からの広報でどんどん活動していただきたいと思っております。これもやはり10年計画でございます。山の相というのは変わりますので、これも見直しもしていかないといけないだろうと。経済的に利益が上がるかどうかというのは大事なことで、森林組合も企業ですので、そういう見方からすればやはり利益を生まなければ何にもならないということでございます。新しい力の方が入っていただいて、河内長野市の総面積の4%を占める市有林であるので、ボランティアのお話が出たところで申し上げました。

【福井部会長】

はい、ありがとうございました。具体的な話になりましたが、この滝畑ダム周辺の市有林について、事務局の方から説明できることはありますか。

【大給企画経営室長】

今、中谷委員がおっしゃいましたけれども、山林が競売に出て、これを市が買ったと。

【福井部会長】

いつの時点ですか。

【大給企画経営室長】

3年か4年ほど前になります。

【福井部会長】

そのことの活用法とか開発計画について、文章になったものはあるんですか。

【大給企画経営室長】

ですから今、活用計画について策定中と聞いています。

【福井部会長】

市有林には名前がついているんですか。

【大給企画経営室長】

まだついていません。その山自体の名称はついていないです。

【福井部会長】

書いたものがあれば後で資料配布でもしていただければと思ったのですが、まだないようですので、とりあえず聞かせていただきましたので。はい。

【大田貞委員】

ちょっと個別に入っているようなんですけれども、そのことなんですけれどもね、全国どこでもそうなんですけれども、そういう公用地っていうようなもの、あるいはまた、公共施設というものは、こういうものですね、そもそも行政に閉鎖されているような感じがあるんですね。河内長野市の場合「自然との共生」という言葉が入っている。自然との共生というのは何かというと、山林なら山林があって、そこにいろんな人が自由に行けて、そして、そういう雰囲気を楽しめると、そういう必要があると思います。これをもう一つ、いわゆる活性化というか金銭の方とつなつないでいくと、前にも私申し上げましたけれども、河内長野市というのは大阪府のリゾートゾーンなんです。そんなに大げさな意味ではないですけれども。観光客がいろいろ遊びに来ている。そういう人たちにもっと活発に利用していただいて、その中で、いわゆる小さな産業かもしれないけれども、産業育成というものもやっていけばいいのではないのでしょうか。そうすると、そういうものを、そちらに森林組合の方がいらっしゃいますけれども、森林組合に投げかけてしまうのではなくて、それをもっと大きな意味で、行政が広い分野、いわゆる公園課も環境課も皆一緒になって、これをどう利用しようかという、そのような利用方法というものがあってしかるべきじゃないかなと思います。いわゆる縦割り行政になって、これは私の分野で私に利権があるからこっちの方に取り込みますよというようなことになってしまうから、商店街にしても農地にしても山林にしても皆、一般に住んでいる人たちが利用できないと。だから、そういう風なことを、もう少し開放といたらおかしいんですけども、広く利用できるようにしていただきたいなという風に思います。

【福井部会長】

はい、ありがとうございました。ここで少々整理をさせていただきたいと思うのですが、本日の会議の目標は、先ほど申し上げました通り、この第4次総合計画基本構想骨子(案)の第1章と第2章について、当部会の担当分野にかかわらず全般的な立場からご審議いただくということでございます。

第1章は、総合計画策定の性格ということなんですけれども、私考えますのに、ここに書いてあることで、さようでございますか言っておいたらいいのではないかと思います。総合計画策定の性格といっても、それはですね、第2章の方で論議すればいいことなのではないかと。ただ1点、これまでの議論いただいた中で、大田貞委員からかなりのご発言がございましたけれども、総合計画を全国の各市を見ると、ほとんど同じであるという風なご指摘がございましたので、この第1章に関しましては、総合計画を河内長野市ならではの個性を出せというようなご意見だったと思うのですが、第1章のこの性格ということに関しては、この個性を出すべきか出すべきでないか、出すべきでないという意見はないかと思うんですが、個性を出すとするれば、どういう風な形で個性を出すのかということについて、まずちょっと議論を深めていただきたいと思います。いかがでしょうか。どのような個性を。

【大田貞委員】

第1章でいいますとですね、「こういう風な個性を出しましょう」というのは、ここでは書きにくい感じがするんですけどもね。まあ、一つはタイトルがありますよね、いわゆる総合計画としてのタイトルが。その中に、先ほど私申し上げましたけども、これがいいというのではないのですが、いわゆる「大阪府のリゾートゾーン河内長野」。いわゆる里山というのが一般的にあります。この河内長野というのは“里まち”ではないかと。要するに、里がまちになったということですよ。そういう風な、特色のあるような言葉を入れることはこの中では可能かもしれませんが、性格づけという意味ではっきり書けるのかどうか、ちょっとその辺を事務局の方に聞かなければいけないと。

【福井部会長】

今のご意見は、例えば“里まち”というような言葉を出せということですか。

【大田貞委員】

いえ、例えばの話でしてね。

【福井部会長】

現状は“里まち”であるから、“里まち”から脱皮せよというご意見ですか。

【大田貞委員】

いえいえ、脱皮じゃなしに入れろということですね、自然との共生であれば。先ほど谷口委員からお話がありましたけども、「河内長野か」と、その部分はあるです。ですけども、河内長野というのは、風流、自然というものがあって、田舎臭さもあるのかもしれませんけども、それが取り柄だと。その取り柄を取り柄として発表してしまえばいいのではないかと。

【福井部会長】

はい、里山とか里海という言葉は一般化しておりますけれども、“里まち”というのは非常に個性の発揮につながるのではないかと期待は抱かせられますが、同時に昨今の熊の被害を考えますと、“里まち”というのは熊がしょっちゅう出てくるような感じもしないではありませんが。第1章の性格に関しては、それぐらいの、“里まち”ということも考えてはどうかというようなことで。

【大田貞委員】

ですから、私がここで言いたいのは、“里まち”というのは例えの言葉であって、要するに、河内長野という自然と共生できるようなまちにふさわしいまちづくりの目標の方向性という部分を入れてもいいのではないかと。

【福井部会長】

はい、どうぞ。木ノ本委員。

【木ノ本委員】

木ノ本でございます。私も21歳で独立開業させていただき、商売をさせていただきました。非常に商売下手な商売でしたが、ちょうど10年前に議員にならせていただいたんですけども、その10年前がちょうどこの第3次の総合計画の策定の時期でした。自分で商売をしながら商工会、あるいは青年会議所の活動をしてきたので、子育ての中で教育のあり方ということも……。今、皆様方からご指摘のありました“里まち”は非常にいいご提案ではないかと思えます。なぜならば、里山というのは、要するに、元来、薪を採る山なんですね。自然ではないのです。これはやはり、手を加えなければ荒廃します。この河内長野というのは、ちょうど30数年前に、その里山を削って開発して、住宅地になったのです。その里山を削ったから、逆に周辺に旧村が残っています。その旧村と、新しく開発した住民の皆さんとが学校を通じてうまく交流されています。そういう意味では、河内長野は非常にすばらしい、意識の高いまちになったのではないかと。しかしながら、半分、泥臭さも非常に残っています。だから、今コミュニティが非常に危うい時期に来ています、そのコミュニティが危うい時期に来ているということは、要する

にそのコミュニティ、このまちも、常に新陳代謝、あるいは手を加えないと、田んぼで言いましたら常に耕さないと、まちは荒廃します。そういう意味では、“里まち”というのは常に耕し続けないと、まちは荒廃しますよという、もっと根深い、大きな意味もその中に入るんじゃないかなと私は個人的にそういう風な考えですので、そういった提案は素晴らしいご提案であるなと感心しています。

それでやはり、何を特色に出すのかなと、やはり河内長野の「売り」というのは、絶対にいると思いますね。それは、我々が、長年ここに住み続けている者は気が付かない部分を今、新しく色々と、客観的に河内長野を見ていただいたり、意見を出していただいたというのは、これは非常に素晴らしいなと、私は感心をさせていただいております。過去の10年間です、私達も自問自答、あるいはジレンマを抱きつつです、これまでずっとお世話させていただいて、改善されてきた部分も沢山ありますし、目標を未達成の部分もあると、達成した部分もあると。その中で、これからあと10年というのは、現状をもう一度見直して、今おっしゃっていただいた素晴らしいご提案をきっちり具現ができるように、達成できるようないいものにしていかなければいけないという思いです。

#### 【福井部会長】

ありがとうございました。では、副部会長。

#### 【加藤副部会長】

今の議論なんですけれども、2のところですね、「第4次総合計画策定のねらい」というところで、2番目のポツのところ、「大きな時代背景の変化のもとでは、これまで以上に、まちづくりの目標と…」こうありますけれども、ここを例えば「河内長野独自のまちづくりの目標」という形に再度修正していただきたいと。具体的に、“里まち”ということについては、もうちょっとコンセプトを明確にした後のところで次の段階で入れていただくということにしたらいいのではないかなとちょっと思います。

それと、ちょっと事務局に確認なんですけども、先ほど行政の体制の話が出ましたよね。つまり、今までだと縦割り行政になっていて、なかなか総合的に対応出来ない部分があります。今回のまちづくりの総合計画をつくる時に、3つぐらいに分けているわけですね。そうすると今までの細かい括りではなくて、大きな括りの中で、ひょっとしたら行政さんも動いていただけるじゃないかみたいな期待があるところもあると思うのですが、その行政の組織体制みたいなやつは、ここのところで書くべきことではないということなのではないでしょうか。書いてもいいことなんですか。実施していく時に組織体制も含めて指針になるような計画をつくり、みたくところまで書いていいのかどうかということなのですけど。

【大給企画経営室長】

それは恐らく、書くということになれば、分野でいうと「協働のまちづくり」の「自律協働都市」のですね、の「行財政運営の仕組み」とか、その分野で書くべきという風に思うのですけれども、ただ議論はいただきたいと思います。

【福井部会長】

はい、谷口委員。

【谷口委員】

すいません、さっきとちょっと関連しましてね、実現出来なかった要素ですね、10年で。私自身の観点では、ものすごく良くなったというのがあるのですけれども、かなりやり残した部分があるということで、それはどういう要因でできていないのかというような、ちょっと反省といいますか、課題として整理しておく必要があるかと思います。その一つには、私は、危機感の部分だと思うんですね。私自身は個人的には、親を遠距離介護した経験があるので、それは自分の未来像ではないかと。自分もあんななったら困るなというのがあったんですね、一つには。そういう小さな危機感もありますし、まちとして見た危機感ですね。このアンケート調査で、3,000人ちょっとのあれで、6%の人が、このまちをすぐに出て行きたいという風なのがあったのを見て、私は、これは人口換算にしたら、12万人の6%という風にはならないかもしれませんね、これは0歳児とかも入っていますから、20歳以上ぐらいであれをするといくらですか、8万人だとしたら、5,000人位がすぐにでもまちを出て行ってしまふなという受け止め方をしていたんですね。これは、定住意識の比率というのですか、何かそういう行政の、このまちはいいまちかどうかの判断の要素かと思って、私はそれは高いなと思っていたのですが、しかし、たまたま、資料を見ていて、柏原市の総合計画があったのですね。それを見ていて、表現的には今、大田さんがおっしゃっていたように同じような表現やなあと、これ、河内長野市と書いてあって、この通りいけるなという感じで見ていてね。最後の定住意識の項目があって、それによると12%か、10%を超えていたんですね。それでも「良好」と書いてあるんですよ。こんなものなのかなと思って、それから比べたら、河内長野は随分住みたいなあと、逆に言えばね、人が多いのかと一安心やったんですね。だから、それが行政上からの指標みたいな、経験値みたいなものがあって、これが10%を超えていたらちょっと「」ですよとか、そんなものがあるのかないのか逆に聞きたいのですけれども。こういったまちづくりで、一番危機意識を持っているのは、私は行政の方だと思っているのです。先ほど加藤先生がおっしゃっていたように、行政の人はものすごくにぎわいのイベントとかに参加したり、これはやはり財政的な面から給与も下がってきますからね。そういうような、ひしひしと、このままでは大変なことになるという危機感があって、やらざるを得ないと、まちのひとが動かないと。だからそういう

面で見ると、いい意味の危機感を持って取り組むのと、まあ何とかなるだろうというレベルで何もやらないのとでは、随分変わってくるかと思うんですが、その辺についてはどうなんですかね、この6%の受け止め方は。

**【大給企画経営室長】**

定住意識とかそういうパーセンテージを何と比較するのかというのは、比較対象が非常に難しいです。ですから、我々はそういう機会機会を捉えて、その指標、数値が上がったり下がったり、それがどういった要因とか、そういう分析活用することを主眼に置いておりまして、全国的に見てどうなのかという、こういう比較対象はないと考えています。

**【谷口委員】**

はい、わかりました。ちょっとその辺のことが気になりましたもので。

**【福井部会長】**

議論としては既に第1章を終えて第2章の方に入っていると思いますが。

**【大田貞委員】**

第1章でここに書いてあるのと、この第3次総合計画の内容と何か合わないのですが。これはどういう意味なんですか、第2章は。

**【福井部会長】**

具体的におっしゃっていただけますか。合わないというのはどこがどういう風に合わないのでしょうか。

**【大田貞委員】**

第1章というのは、この第3次ですと「計画の背景とねらい」となっているんですよ。ただそれを、第1章の「第4次総合計画の性格」というものはどこへ入れるのかなというのですが。

**【福井部会長】**

昔の計画とこれから作ろうとしている計画が合わないとはどういうことですか。

**【大田貞委員】**

ですから、この第1章という「総合計画の機能」だとかいうようなことが、どこに入ってくるのか。

【福井部会長】

前の計画ではどう扱われてきたかという。

【大田貞委員】

この総合計画ではどういう風になるのかという風な。

【福井部会長】

これから作ろうとしているのは新しい計画でございますので、それが過去のものと根本的に矛盾するとか、そういうことでございますか。

【大田貞委員】

例えばね、第1章の第2のねらいがあって、で「まちづくりの目標と方向性の明示」ということが、この第3次ですと第2節の「計画のねらい」ということになるんですか、どうなんですか。

【大給企画経営室長】

3次の比較ということになりますと、総合計画の役割につきましては、10ページ第1節のところには書いております。ただですね、構成は第3次を踏襲するというわけではないので、位置づけを先にここで出していこうという考え方になっています。

【福井部会長】

今から作ろうとしているのは第4次計画でありまして、ご指摘のものは、その前の第3次計画でございますので、第3次計画に書いてあることが、第4次計画を縛るというものではないかと。

【大田貞委員】

いえ、そういう意味ではなくて、私自身が理解するためにちょっとお聞きしたいということなんですけど。と言いますのはね、第1章の2の「第4次総合計画策定のねらい」という、「策定」が入っているんですね。第3次総合計画ですと、第1章の第2節に「計画のねらい」があったんですね。「策定のねらい」と「計画のねらい」はぜんぜん違うんですね。だから、この「策定のねらい」というのが第1章に入っているのかどうか。

【加藤副部会長】

すいません、勝手な解釈なんですけど、この「策定のねらい」というのは、今までの基本計画とは基本的に違うスタンスで作りたいという行政の気持ちが入っているような

気がするんですよ。一つは、多分今までだったら、前おっしゃったように、どこの総合計画も似たり寄ったりで総花的で、とにかく何でも書いていったらいいと。しかし、そういう時代ではない。しかも、もっと独自性を発揮しないといけない。そういう意味では明確なまちづくりの目標と方向性を出していきたい。

【大田貞委員】

わかりました。私自身が考え方が錯綜してしまいましたので。じゃあ、この「策定のねらい」であるとか「機能」とか「しくみの構築」であるというのは、もう論議することではないのですね。

【加藤副部長】

ただ、先ほどおっしゃったように、独自の目標作りというか、何か理念というか、考え方の基本的なところですよ。哲学っぽいやつ、これは入れておくかどうかは対象とされているようですし、議論の対象にもなるのではないかと思います。もう一つ、「まちづくりのしくみ」とわざわざ書いているわけです。恐らく、第3次の時は、そんなことは口では言っているけども、こんな委員会を作らなければ、みんなの意見を吸い上げると言うことは、あまりしなかったのではないかと。あえて、ここでそういうことを打ち出しているということと、僕はプラスアルファで、皆さんがもしこれはこう書くべきだっているのであれば、例えば「まちづくりの仕組みの構築」として「まちづくりは行政だけではなく市民もまちづくりの課題を設け共有することが必要である」と、こう書いてあるのですが、僕は進んで、「まちづくりの課題や目標を共有されるのではなくて、積極的に参画することが必要だ」という所までいくというのであれば、これはすごい一つのポリシーだと思うんですよ。そういうことを議論する場なのかなとちょっと思ったのですが。

【大田貞委員】

わかりました。それでは一つここに入れてほしいのは、「まちづくりのしくみの構築」なんですが、先ほどの縦割り行政がありまして私は言いましたよね、それを排除していただきたい。まちづくりというのは、要するに人間も入るし、それからハードも入るし、環境も入るし、色々なものが全部入ってまちづくりです。それを行政の中で縦割りで割ってしまっているから、それで色々、いい考え方が入っていかない。だから今、中心市街地活性化計画は、昔の章でいうと、11章が「参加してつくる」という風になっていきますよね。それと同じようなことで、河内長野のまちづくりというものも、全部の部署が入ってつくと、そうしてほしいのです。だから、それをここに入れてほしいのです。

【福井部長】

先ほど事務局の方では、この問題はどこで扱われるはずだとしていましたか。

【大給企画経営室長】

今日の構成の表なのですが、「協働のまちづくり部会」の中で、5 の が行財政改革でございまして、その行財政運営の仕組みの所で体制が当然、出てくるであろうという風に認識はしております。

【福井部会長】

これは、基本構想骨子（案）ではどこに書かれていますか。

【大給企画経営室長】

骨子（案）では、この章ではなしにですね、骨子（案）の 9 ページの 5 番「自律協働都市」でございます。

【福井部会長】

ここでは縦割り行政を排除するというようなことがテーマに入っていると。入ってくるはずだと。

【大給企画経営室長】

いえ、そういう文言は入っていませんが、そういった議論が出てきておりますので、そういうフレーズがここに書かれていくということになるかと思います。

【福井部会長】

ただ今の田田貞委員のご意見は、そういう所ではなくて、第 1 章の中にそのことを入れろということですか。

【大田貞委員】

そうですね。「まちづくりの仕組みの構築」というのは、まさにそのことが。

【加藤副部会長】

入れるとすれば、例えば 2 番目のトップの「第 4 次総合計画は部局を越えて、また、市民参加、市民との協働による『市民みんなの計画』として策定する」。これですね。

【大田貞委員】

部局を越えてという意味合い、どこかの部がやっているという意味じゃないんで、各部局が総合的にやるというように示していただいたらどうかなと思います。

【福井部会長】

第1章の2の ですか、 ですか。

【大田貞委員】

です。

【福井部会長】

ですね。第1章の2の に入れるべしということですね。それが皆さんのコンセンサスになるかどうかは置いておくとして、そういうご意見が出たということを吟味していきたいと思います。

第2章に入りまして、これまでの議論でもかなり出ておるんですが、あと残された時間で出来る限り議論を深めたいと思うんですが、そのテーマとしては、簡単に申しますと、まず人口の問題。これは、少子化とか高齢化とか、高齢者の中にも元気な人がおるとか、そういう風なことも全部含めまして、人口の問題。それから、市街地再開発、市街地の問題。それから、教育の問題ですね。前後しますが、市街地のところに都市基盤整備の問題ですね。市街地再開発と都市基盤整備と、それから教育の問題。教育問題の中には国際交流の問題も含めます。これぐらいのところ、これらを含めて「三拍子そろった」とかイメージをどうするかということが出てくるかと思うのですが、問題を個々にいたしますと、人口の問題、市街地再開発、都市基盤整備の問題。市街地再開発の問題のところには、市街地でないところにおいても、議論していただきたいのですが。それから、教育の問題ということを中心にして議論を深めなきゃならないと思うのですが、どの部分でもいいので、20分ぐらいまでに。

【大田貞委員】

策定の背景ですので、書いてあることは書いてあることでいいと思うんですが、高齢者社会が来るということ、高齢者社会という言葉がですね、何かわずかだけしか書いていないんですが、是非入れておく必要があるのではないですか。

【福井部会長】

少子高齢化が急速に進行していると。

【大田貞委員】

それともう一つ言いたいのは、この前どなたかの委員が発言されてましたけども、別に人口減少ということをね、とりたてて論じる必要はないのではないかと。人口減少といってもそんなにね、20%も30%も減るわけではないんです。人口減少社会の到来という

風に書いて悪いわけではないんですが、それより高齢化社会の方が、少子高齢化社会の方が明示すべき内容ではないかという風には思います。

【福井部会長】

「少子高齢化が急速に進行しており」という文言はございますよね。それでは不十分だと。全体として日本社会として高齢社会が来るというように書けというご意見ですか。

【大田貞委員】

これは、人口減少ということを書いているわけですよ。

【福井部会長】

はい、その中身は、少子高齢化が進行していると。その結果、河内長野市でも人口が減少すると。

【大田貞委員】

中身として、人口減少というようなことは書かなくてもいいのではないかと。12万人が11万人になるんですよ。それでいいのではないかと。住んでいる人にとっては何の関係もないんですよ。

【加藤副部会長】

確かに、人口が減るということ、それ自体を問題にするということではなくていいと思うんですけども、ただ、その中身ですよ。人口が減ってきた時に、おっしゃるように、高齢者の占める比率が非常に高くなってきますね。ここ河内長野の場合は、そういう問題を、じゃあそれをどう受け止めて、どうしたらいいのかということを考えなければいけないということですね。

【大田貞委員】

背景としたらそういうね、「高齢化社会がある」という背景があるんだということを強調してほしい。

【加藤副部会長】

だから、いろいろなことがですね、例えばそのことから出てくるんですよ。先ほど例えば、下水道の整備が進んでいないところがあるとおっしゃいました。これからそういうのを進めて、例えば住宅地として外から人を呼ぶことを考えるのかと。恐らく、これは、僕は不可能だと思うんですよ。むしろ、人口を増やすために、その土地を開発していくというのではなくて、今ですら住宅地の中で、空きスペースというのですか、

それがどんどん増えてきているわけですね。それをどうやっていくのかと。また、場合によっては、より近いところ、駅とかに近いところに、下手したら住宅を集約したらどうかとか。あるいは高齢者の方が一戸建てに住むのはものすごい負担がかかりますよね。だったら、駅前の便利な所に賃貸住宅みたいなものを用意しましょうと。そして、その前の家は、誰かに貸してくれるような、そこを例えば市が斡旋するとか、そういうことを考えないといけないというように考えると、出てくると思うんですね、認識の仕方によって。

**【大田貞委員】**

そういうことの具体的な策をですね、考え方を持っているんですけども、そこまでは申し上げませんが、今おっしゃったようなことつくらなければならないと。その前提として、これは入っていく世界ではないかと。

**【島田委員】**

総合計画の策定の背景ということで、案には5項目書いてもらっているんですけども、よく読むと人口減少、安心・安全に不安が出ているとか、環境破壊、財政難とか、ちょっと暗いイメージがあってですね、暗黒の時代を迎えるのかなと。あまりにも背景が暗すぎるイメージが多いと思うんですね。やはり、もっと明るいところもあるんだというポジティブな背景がもっともっと出していかないといけない。例えば一つに、都市間競争という話が出たんですけども、国なり府なり、そういう財政的な部分もあるんですけども、大きな転換期と話をしました。これからは地方でやってくださいよと。まちづくりも行政も、地方が主体になってやっていけますよという、これは前向きに捕らないといけないと思うんですね。今まで国がある程度、地方に対してコントロールをしていて、国の指揮下の下に地方自治が行われてきたと。それが、ようやく住民自治になり、各まちでまちづくりが本当に自立してやっていけるとい、本当に前向きな考えを持っていける時代だと思うんですね。ですから、その上で、先ほど来からの個性的なまちづくりもありますし、市民が積極的にこういうまちづくりなり会に参加できるという部分を、もっともっと背景の中に散らして、住民自治、住民のための地方自治、まちづくりをしていけるんだというところの背景が必要なのでは、そういう視点が必要なのではないかと僕は思います。

**【福井部会長】**

はい、どうぞ。

**【木ノ本委員】**

ちょっと基本的なことお伺いしてもいいですか。この第2章のですね、背景だけをこ

ここに羅列するのか、こういう背景があってそれに対する、今あった、積極的な対応策をこの中に盛り込むのか、それはどうなんでしょうか。

【福井部会長】

それは誰が答えるのでしょうか。

【大給企画経営室長】

ちょっとよろしいですか。ですから、背景についての今の状況ですね。暗いイメージというか、おっしゃいましたけども、一応こういう課題、時代の潮流があると。それで、この次に、本市のいわゆるタレント、発展の可能性というところへかけていっているわけです。

【木ノ本委員】

ですから、ここでね、1章と2章を議論するのであれば、例えば背景だけ書かれたら議論できないわけですよ。前向きな意見も関係ないですよ。だから、それに対する対応が次のところで出てくるわけですね。だから、現状認識のための大きな項目として、ここに書くというのであればね、ちょっと。せっかくの色々な意見がこの中に活かされにくいかなと思うのです。むしろ、次の段階でもっと議論した方が、もっと積極的な意見が出てきますので。

【福井部会長】

第2章の1としては背景と。第2章の2に、これまでの歩みと発展の可能性ということなので、対応策は第2章の2以降でと考えればいいかと思うのですが。そういう風に分けた書き方ではいけないというご意見ですか。

【木ノ本委員】

いえ、そうではないのですけども。

【福井部会長】

一体として書くべきと。

【木ノ本委員】

現状認識であれば議論の必要がないというか、現状だけ羅列しておけばそれでいいだけです。

【馬場委員】

それは、5でもまだ足りない意見があるのではないかなという意味かなと思うんですけども。一応、たたき台として5まで出来ていますが、その中でもっとあるのではないかなという時に、書き足せばいいという、そういう意味の背景かなと思います。

【福井部会長】

現状認識なのですが、それをやはり、暗いところを強調しないで明るい部分を書けとかね、そういう意見はあるわけなんです。はい、どうぞ。

【坂部委員】

お聞きしていますと、まず第2章についてですね、部会長さんが、ここに事務局案で挙げられている内容とは別に、人口減少とか、市街地再開発とか、都市基盤整備とか、教育の問題と、この4点がという風に言われまして、ということは、この事務局案の骨子(案)の中の文章案についてですね、これはもうダメだということで、部会長さんがおっしゃられた4点に変更するのだという風に理解していいのでしょうか。

【福井部会長】

いいえ、それはみんな違います。そうではなくて、本日の部会でこれまで出た議論を、キーワード的に重点的に整理して、これらの申し上げた4点について、これから議論を深めていただきたいという意味で、部会の審議の進行上の目安として申し上げたわけでございます。

【坂部委員】

わかりました。そういうことですね。

【福井部会長】

時間の関係もございますので、あと1、2分でこの内容の審議はいったん打ち切りたいと思いますので、どうぞ。

【大田貞委員】

単純に策定の背景ということで申し上げますと、これは市としたら不満があることかもしれないけども、河内長野市っていうのは、単に財政的なもの、分権的なものということだけではなくて、いわゆる経済圏という意味で、大阪市なり、堺市なりに属しているというのですか、何かそういう独立性がないわけです。要するに、ここに挙げたことが、今後の課題ということであれば、言葉として、経済圏としての自立性が薄くなっているみたいなこともですね、入れてほしいのです。そうしておかないと、中心市街地をこんな風にしたらいいいという、その一つの課題になってこないのですから。

【加藤副部長】

恐らく、皆さんが悩まれているところは、第 2 章の背景があまりに抽象的、スパン的な議論で、本当はここと次のまちづくりの基本理念が結びついてくるはずだと。今のところはバラバラだと。だったらいっそのこと、ここを止めて、第 3 章のところに現状認識みたいなやつをパーっと入れて、それで矢印ですね、だからこのまちづくりの理念が出てくるのだというようなことがはっきりわかるような、そういう表現の仕方したらどうかということではないのですかね。部長さんがまとめられても、結局は皆さんは現実の河内長野に対する認識をずっと言われていたわけですよね、問題点を含めて。だから、他の議論というのは、必ずまちづくりの基本理念の部分に関わってくるわけです。そういう位置づけをした方がいいという、僕は議論だと思ったのですが。

【福井部長】

一応ここで一旦切りたいと思うんですけども、第 1 章と第 2 章、それから次の第 3 章、あるいは第 4 章のところまで、議論することが残っているわけですが、それで次は、全体の情勢から申しますと、次の第 2 回部会で、これも全体的な立場からの、本日と同じような議論をしていただきたいということで、部会だけの都合で決めればよいことなのですけども、次回の日程を諮っていただきたいと思います。

< 日程調整のやりとり >

【福井部長】

11 月 28 日（日曜日）午前 10 時から 12 時で決めさせていただきます。これは、場所は事務局で決めていただいて、また通知していただくということでお願いします。内容については、本日の大体の話の内容の記録が 28 日でしたら出来ますか。それも踏まえて本日の通知ということでございます。それから、全体の計画としては、この議論の進み具合によっては、臨時の部会を、部会としては 4 回が計画されているわけではございませんけれども、もう 1 回、年末年始にですね、正月返上というようなことも構想には載っています。ということをお頭に置いておいてください。それでは本日は終了します。